

団塊のカタログ

トシタロー・クラフィティ

ワシが小学校3年生の昭和31年である。

憧れだった団地

前年発足の**日本住宅公団**（今の住宅都市整備公団）が、団地の入居者募集を開始した。

1戸平均 40平方メートルの中に、6畳と4畳半の2間にダイニング・キッチンとバス・トイレを押し込んだ、いわゆる**2DK**（!）が標準仕様であった。

家賃は**4,600円**ではあったが、大卒初任給**12,000円**の時代だから決して安くはない。

この頃の家庭風景はというと……夕食が終り、一家団らんのひと時、タンスの上には今のミニコンポ並の大きさの**ラジオ**があつて、一家はP盤アワーが寄席中継かなんか聞いている。それから銭湯へ行って帰ってきて「さあて寝るか」となつて**チャフ台**のアシを折り曲げ、部屋の隅に片付けて布団を敷く。

こんな風に、食う場所と寝る場所が一緒なのが当たり前のご時世に、団地には狭いながらも**DK**（当時としては最新のステンレス流し台付き!）があることから寝食分離が可能になり、これが住生活を大きく変えた。

台所と食卓がくっついているから、後片付けも楽だ。しかも、風呂（ガスだつてば!）があるから銭湯に行く必要もない。

男子**小便**は便座をあげて、それ以外（男子の**大**と女子の**大・小**）は後ろ向きに腰掛けるように線の人形の図入りの解説まで付いている西洋式便器までもが新鮮だった。

関西方面では大阪の堺市金岡、関東では千

葉の稲毛を皮切りに、団地は増え続けた。

あれからザッと40年、住宅不足解消から華々しくスタートした団地であつたが今ではすっかり様変わりしてしまっている。

高くて遠くて汚ない**団地の三拍子**は当たり前、権利金・敷金・礼金や2年ごとの更新がないことだけがトリエで、とつくに憧れではなくなっている。

そういえば、団地族とか団地妻なんてのもいつの間にか死語になってしまった。

マナスル登頂成功

まさありつね
植有恒氏率いる日本山岳会一行が8,125mの**マナスル**登頂に成功した。

敗戦から10年が過ぎ、復興もそこそこ順調の中、日本初とか戦後初なんてニュースが海外から届くたびに大騒ぎしたものである。

世界一のエベレストを筆頭にヒマラヤには高い山がたくさんあるらしいというのは知っていたが、マナスルなんて山は知らなかったし、そもそも登山に興味はない。

そこに山があるから登るくらいはいいとしても、クソ寒い時期やむずかしいルートをわざわざ選んで挑戦するヘソ曲がり根性が理解できないからだ、このマナスル登頂成功以降海外登山が盛んになったのは事実だ。

昭和52年には田部井淳子さんを隊長とする登攀隊が女性で世界初のエベレスト登頂に成功し、57年には長谷川恒夫氏がアルプス三大北壁の冬季単独登頂を成しとげているが、極めつけは何といつても植村直己氏である。

昭和59年2月、北アメリカ大陸の最高峰マッキンリー（アラスカ）の冬季単独登頂に成功、世界初の快挙を成しとげた直後に消息を絶ち、そのままになっている。

ヨットの堀江謙一氏もそうだが、冒険野郎をあまり美化してはいけない。

しょせんただの目立ちたがり屋、成功すれば「アラスカー人ぼっち」なんて本を出版して名誉と金が手に入っていたはずだ。

ハンガリー動乱

自由選挙を国民に約束したハンガリーのゴムルカ第一書記に対し、それでは「ワルシャワ条約機構の結束が崩れてしまうから困る」とするソ連の横やりが始まりである。

ゼネスト・暴動・反乱が相次ぎ、そのたびにソ連に弾圧され、首都**ブダペスト**は虐殺された死体の山であふれ返り、シベリアの収容所送りのドレイ列車は女・子供を含むハンガリー人で常に満員であった。

これに味をしめたソ連は、この後次々と子分の同盟国にチョッカイを出すようになる。

1968年（昭和43年）8月、メキシコ・オリンピック開幕直前に、東ドイツ・ポーランド・ブルガリア、そしてこの頃にはすっかり良いコになっていたハンガリーなどと共に、今度は**チェコ・スロバキア**に押しかけた。

ハンガリーの時はあせって自分だけでケリ付けちゃったものだから、どうしても内政干渉にとられてしまう。実際そうなんだからしょうがないのだが、そこは頭の使いよう、子分たちと連合軍で行動すれば、グループの結束を乱すフラチ者を説得するという大義名分が立ち、カドが立たない。

それから11年後の**1979年（昭和54年）**、こりずに**アフガニスタン**に侵攻した。

1973年の王政廃止・共和制宣言を皮切りに

クーデターが相次いで起こり、そのたびに大統領や革命評議会議長が殺され、政情不安定な状態が長く続いた国であったが、今度は単独で行動せざるを得なかった。他の子分たちがソッポを向いてしまったからだ。

ハンガリーにしても、チェコ・ポーランド・東ドイツの各国にしても、ソ連に侵略された苦い経験を持っている。

それでもこの頃はまだ東側諸国には二ラミがきいていたもので、翌年の**モスクワ・オリンピック**はアメリカを始めとして不参加表明国が続出したが、何とか身内だけで開催にまでこぎつけるくらいの力があった。

ところでハンガリー動乱のこの年は**メルボルンでオリンピック**が開催されている。

この時のソ連の指導者**フルシチョフ**は8年後の**東京オリンピック**開催中に突如解任され、跡目を相続した**ブレジネフ**がチェコにソ連軍を侵入させたのが**メキシコ五輪**直前の出来事である。

アフガンの時はモスクワ五輪（1980年）の前年で、西側ボイコットの原因となった。

さすがは平和の祭典、オリンピックの年は何かと騒々しいが、さて**シドニー**は？

今度はスエスで

ハンガリー動乱も、冷静にかつ歴史的に分析すれば、しょせんは共産主義国家群というコップの中の嵐にすぎない。

たとえば悪いが、関西の山口組が系列下のいちわい一和会の反乱の芽をつんだようなもので、関東の住吉連合や国粋会に影響はない。

ところがちょっと後に起きた**スエス動乱**になると、事情はかなり変わってくる。

エジプトに進撃した**イスラエル**軍は、旧約聖書でおなじみのシナイ砂漠を制圧し、今にも**スエス運河**に迫る勢いであった。

これに**イギリス**と**フランス**がつき、エジプトの首都カイロを爆撃した。

背景にスエズ運河の利権がからんでいるからで、一時はソ連と中国も巻き込み、あわや第三次世界大戦の大騒ぎであった。

アラビアのロレンスが活躍した頃の第一次世界大戦でも英・仏のセコさが目立ったが、このスエズ動乱の時でも同様である。

1 カ月もたたないうちに戦いは終了、結果はイスラエルの圧勝だったが、その後イスラエル対アラブ諸国の対立は続いているのはご承知の通りで、モーセが紅海を二つに割ってエジプトを脱出して以来の3,000年の争いにたかだか戦後50年は屁でもないようだ。

クワイ話題ばかりじゃない

朝鮮戦争から始まって、この年のハンガリー動乱・スエズ動乱とたてつづけに起こった国際紛争は、第二次世界大戦後の秩序が不安定な状態であることの象徴である。

その一方で、日本は着実に戦後復興の道を歩んで行った。ゴツツァンの朝鮮特需に引き続き、スエズ動乱は株価の高騰を招き、大衆投資も盛んになった。

今ではあまりいわれなくなっただが、マネービル（マネーとボディーズ・ビルの造語）が流行語になったのもこの頃だ。

そんな日本の戦後復興を象徴する明るい出来事がこの年の11月に2件あった。

国鉄（今のJR）の花形路線**東海道本線**で唯一汽車（SL）が走っていた米原・京都間に電気が通り、東京から大阪までの全線がイッキに電化された。

花形ですらこれだから、他の路線に至ってはもっとヒドいということになる。

今でこそ大人は懐かしさから、子供はモノ珍しさから乗りたがるが、そんなに優雅なも

のではない。春・秋・冬の季節は窓を締めきれし、暖房もあるから良いが、ヒサンなのは夏だ。なにしろ、冷房がない。

当然、窓は開けっ放しになっている。

まっすぐ走っている内はケムリがそのまま後ろに流れてゆくから良いのだが、自分の座っている側がカーブに差しかかると、ケムリが風向き次第で飛び込んでくる。

駅弁を広げている時などはヒサン極まりなく、メシにススが付くだけなら良いが、あわてて窓を閉めようとして落っこしてしまうこともある。そして、最悪はトンネルだ。

「まもなくトンネルです。窓際の方は窓閉めにご協力ください」とアナウンスされるのだが、同行者と話に熱中していつつかり閉め忘れてしまうこともしばしばで。そんな時は周囲の冷たい視線をうけることになる。

「このバカつたれが！おめえのせいで顔がまっクロになってしまったでねえべか！」

いかにもそう言いたげな形相でジロツとにらまれるのだ。「どうもすみません」と言いつつ窓を閉めたことも何度か、こんなSLに懐かしさを抱いたことは一度もない。

むろん今さら乗ってみたいとも思わない。

認められた国連加盟

「平和とは、ちよつと前の戦争と次の戦争の間に人類が見る束の間の夢」とはよくいったもので、戦争がなかなかなくなる原因の少なくとも一つはハッキリしている。

キッカケと経過はともかく、結果的に勝ちさえすれば、物的資源（モノ・金・水源）と人的資源（労働力）が手に入るだけでなく、権力と正義が転がり込んでくるからだ。

独立・防衛・祖国・人民とかいう理由付けだって戦争突入の言い訳に過ぎないが、勝てば正論としてハクが付く。

第一次世界大戦後の**1920年**（大正9年）、**アメリカのウィルソン大統領**の提唱によって国際連盟（LEAGUE OF NATIONS）が成立されたが、これがおよそ役に立たず、**1933年**（昭和8年）には満州問題のこじれから**日本**がケツをまくって脱退、**ドイツ・イタリア**もこれに続くといった情けない有様であった。

それ故に勃発した第二次世界大戦だが、勝てばこっちのものというわけで、**米・英・仏・中・ソ**の戦勝国が中心になって自分たちに都合の良い同業組合を、戦後間もない**1945年10月**にデッチ上げた。

これが国際連合（UNITED NATIONS）で、翌年第1回の総会がロンドンで開催され、初代事務総長にノルウエーのリー氏を選出、最重要機関として安全保障理事会が発足した。

安保理事会は、連合軍の中心的存在だった常任理事国5カ国と非常任理事国10カ国で構成されており、前者には拒否権という特権があつて、全会一致以外は認められない。

1952年（昭和27年）には連合国諸国と日本との間で講和条約も発効され、これ以降毎年加盟申請したが、ソ連と中国に拒否権を発動された為、長い間加入が認められなかった。

それでも日ソ国交回復交渉が成立したことから状況は一変、安全保障理事会の承認を受け総会でも可決、この**昭和31年**に80番目の加盟国としてやっと認められたのである。

その後冷戦も終了、国際秩序は経済問題と地域紛争が最重要課題になった。

国連がしつかり機能されたことは一度もないが、他に話し合いの場がないのも現実だ。

日本国憲法も国連協力が大前提だし、実情にあわせて改正してしかるべきだ。

「なんとしても平和を」などとバカばかり言っている内は世界から相手にされない。

特に、北朝鮮と中国にナメられる。

日米安保条約がなければ尚更だ。

ご意見無用の平和論

戦争は良くないが、一向になくならないのは国・民族・宗教の数だけ正義があるからだ。世界は一つではない。

勝てばこそその**官軍**だ。明治維新だって負ければ、幕府に逆らった**賊軍**として薩摩・長州の藩主は切腹の上、お家断絶、西郷隆盛や桂小五郎や鞍馬天狗も市中引きまわしの上、極門・はりつけ・さらし首になったはずである。「尊王」はしよせん建て前、一方の「攘夷」はどうなったんだ？

「笑って許そう自分の失敗」の典型。

原爆を落としたアメリカに正義があるとは思わないが、当時の我が国が正しかったということもないし、従来の人道的な(!)兵器なら良いわけでもない。

原爆だったからこそ、悲劇の国の仲間入りができたのだ。皮肉だが現実である。

当時の大日本帝国が無駄な抵抗を続けたから「原爆が戦争の終結を早めた」のだ。

沖縄には、補助金という名の税金が他県より多くつぎこまれている。

基地がいやなら引っ越せば良い。

住環境を選択する権利も責任もある。

アフガニスタンを侵略した点ではソ連もアメリカといい勝負なのに、**ベ平連**（ベトナムに**平和**を！市民**連合**）はあつたが**ア平連**はなかった。

君が代は「天皇の御代」のことで議論するだけムダ。国民に親しまれていないのも事実で、歌わない自由もある。

道端で日の丸の小旗を振ってマラソン選手を応援する人も、祝日に大旗を掲揚しない。

国民投票には憲法改正が必要である。

国旗・国歌のない国はない。対案を示せ。

「赤地に紫」「サクラサクラ」だと？